



2009年9月23日放送

漢方医人列伝「後藤良山」

北里大学東洋医学総合研究所 所長 花輪 壽彦

本日は後藤良山についてお話しいたします。

後藤良山は、江戸時代の名古屋玄医に次ぐ古方派のさきがけとされ、1659年に生まれ、1733年に74歳で亡くなったとされています。後藤良山には実は、自ら書いた著書がありません。弟子が書いたとされる『師説筆記』は写本として世に伝えられています。

また『良山先生遺教解』の中には良山の語として「宋明緒家の陰陽旺相・臓腑分配区々の弁に惑わず、百病は一気の留滞に生ずることを知らば即ち思い半ばに過ぎん」という有名な言葉があり、良山は唐代の考えを尊重し、宋・明代以降の諸家の説、特に臓腑区分、経絡理論などの学説をとらないとしました。これが良山を古方派のさきがけとする所以です。

しかし、実際に『傷寒論』の処方を用いていたかということ、あまり使っていなかったようです。その証拠に、良山の子である省（しょう）、後藤椿庵（ちんあん）が著わした『傷風約言』には、『傷寒論』の運用について詳しく書かれていません。

ちなみに、後藤流による『傷寒論』の解説書は、良山より6代後の後藤古漁（こりょう）の『五書別髄』（ごしょてきずい）です。ただし、この出版は1826年で、良山自身は『傷寒論』の処方についてはあまり触れていません。

良山の主な主張は、“一気留滞説”といわれるものです。『師説筆記』の中には「凡そ病の生ずる、風寒湿によればその気滞り、飲食によるも滞るなり。七情によるも滞るなり。皆元気の鬱滞するにより成るなり。故にその支ゆるものは大概此の如く違えども、その相手になり滞るところは一元気なり」という有名な言葉があり、この「一元気」が滞るところが一気留滞説です。元気が滞ることは積気（しゃくき）とも呼ばれ、『師説筆記』や『病因論』にはこの用例が随所に登場します。

後藤良山には、湯熊灸庵（ゆのかまきゅうあん）という渾名があり、「湯」は温泉、「熊」は熊胆（ゆうたん＝くまのい）、このほか番椒（ばんしょう＝とうがらし）などの民間薬をよく用い、さらにお灸を多用したことで有名です。これは、今日で言う self-medication（自ら病気を治す）を重視したという意味で、現代医学的にも意義あることではないかと思われます。渾名とは裏腹に、これらの手法で気のめぐりをよくしたり瘀血を治したりしたわけで、これは、当時の曲直瀬流医学の壅流による人參や黄耆など高額な補剤の乱用への戒めでした。

また、『師説筆記』には非常に重要なことが書かれています。それは、いわゆる「未病」の重視で、養生が第一という点がいたるところで触れられています。特に、食べ物が大事で鶏肉、鶏卵、海の魚、うなぎ、さらに現在では食しませんが赤蛙の肉が小児の疳の虫によく、これらをまんべんなく摂り内部を養う。それでも気滞が生じるようであれば、気を巡らす順気剤を使うとよいというのが良山の考え方です。

順気剤というのは、茯苓・半夏・枳実・厚朴・生姜・甘草から成るもので、今日の半夏厚朴湯に非常に近い方剤です。茯苓は順気の主薬で、世の医者は虚証にはあまり用いないがそれは間違っている、枳実・厚朴は気のめぐりをよくして「積気」を消す、半夏は「結気」（気が結ばれたところ）を開くなどと解説をしており、半夏などは体を乾かす「燥」の作用が強くとよくないとされるが、日本人はむしろ「湿」に侵されやすいので、もっと使うべきだと主張しています。

『師説筆記』には曲直瀬道三が香蘇散をよく用いたことに対して、これを構成する生薬の紫蘇も陳皮も表をめぐらすだけであまり効果はない。その点、自分が創製した順気剤は「徹上徹下内外交融する」と述べ、内外上下すべての気のめぐりをよくし、より優れていると自画自賛しています。

良山は診察で脈診を重視し、大小・浮沈・遅数の六脈を基本としてそれ以外の脈を習得すればよいとしました。さらに、腹診である「按腹」とともに、切診は全身をくまなく丁寧に行えと指示し、良山は特に背中診を良く行っています。さらに、『五極灸法』という書籍では、大椎と尾骨とその中間点、中間点の左右三寸ずつの計五点に灸をする方法を万能灸として勧められています。

つまり、体の内側が破られる内傷病は食事療法と順気剤で、外から来る外感病は漢方薬で治そうと言っているわけです。甘草は日本人にはあまり合わないので少なめにしたほうがという指摘もされています。

最後に、大塚敬節先生は『日本思想体系 近世科学思想 下』に、吉益東洞の『薬徴』、『医事或問』などとならんで艮山の『師説筆記』を載せています。この本がその後の日本の漢方の特徴をよくあらわしていることを考えると、大塚先生の見識の高さをうかがわせていると思われます。